

【専門科目】 出題意図・解答例

問1 (1)

【出題意図】

1.臨床経験の深さを確認する

実際の患者事例を具体的に叙述できるかを通して、応募者がどの程度の臨床経験を積み重ねてきたかを評価する。

2.自己省察能力の評価

「できなかったこと」「葛藤したこと」にも触れ、そこから学びを言語化できるかをみる。
専門看護師には自己省察を通じた実践の改善が必須である。

3.専門看護師としての発展可能性をみる

単なる経験談ではなく、その学びを将来的な研究や教育、CNS としての役割につなげる展望を持てるかを確認する。

4.論理的文章力の評価

限られた時間・字数で、事例 → 課題 → 対応 → 学び → 展望という論理的な流れを明確に示せるかを重視している。

【解答例】

私の臨床経験の中で最も印象に残っているのは、急性心筋梗塞で救急搬送され、プライマリPCIを受けた患者の事例である。患者は50歳代男性で、搬送時には強い胸痛と死への恐怖を訴え、処置中も繰り返し「息ができない」「また発作が起きるのではないかと訴えていた。私は当初、緊急治療の流れに追われ、循環動態の安定化や医師の介助を優先した結果、患者の強い不安表出に十分に応じることができなかった。後に、患者から「治療中に孤独で怖かった」という言葉を聞いたとき、大きな葛藤を覚えた。

その後、私は患者に対し、治療経過や安定しているバイタルサインを説明し、安堵につながる声かけを継続した。さらに、家族にも病態や治療経過を丁寧に伝えることで、患者にとって心理的支えとなる存在を確保できるよう努めた。結果的に患者は安心感を取り戻し、リハビリテーションにも主体的に参加できるようになった。この経験を通じて、急性期看護における心理的援助の重要性と、患者・家族支援を統合的に実践する看護師の役割を強く意識するようになった。

私はこの経験から、単に循環動態を安定させるだけではなく、患者が抱える心理的負担を的確に把握し、科学的根拠と実践知を統合してケアを提供することが、回復を促進する鍵であると学んだ。そして、こうした実践を理論的に整理し、体系化していくことが専門看護師に求められる役割だと考える。今後はこの経験を基盤に、心理的援助に関する研究と教育に取り組み、臨床現場に還元していきたい。

問1 (2)

【出題意図】

1.看護上の課題を明確化できるか

事例から核心となる看護課題を抽出し、患者の状態と関連づけて論理的に記述できるかを評価する。

2.具体的な看護実践の根拠を示せるか

実際にどのような看護を行ったのか、観察・説明・心理的援助・家族支援などを具体的に示し、その根拠を明確に述べられるかを確認する。

3.結果と学びを結びつけられるか

実践の効果を患者の反応やアウトカムと結びつけ、自己の成長や今後の看護実践にどう活かすかを言語化できるかをみる。

4.CNSとしての素養を評価

臨床判断力、看護実践の統合性、心理的援助の重要性に対する洞察など、専門看護師としての発展可能性を見極める狙いがある。

【解答例】

前述の急性心筋梗塞患者の事例において、最大の看護上の課題は「強い不安と恐怖の中で侵襲的治療を受ける患者に対して、循環動態を安定させながら心理的安心を確保すること」であった。患者は「また死んでしまうのではないか」という切迫した不安を繰り返し訴えており、心理的苦痛が生理的反応（頻脈・血圧上昇）を助長し、病態を悪化させる可能性があった。

この課題に対して、私はまず循環動態の観察と治療介助を確実にを行い、生命維持を最優先とした。その上で、治療が安全に進んでいること、バイタルサインが安定していることを短い言葉で繰り返し説明し、患者の不安を軽減するよう努めた。また、呼吸苦を訴えた際には、吸気のタイミングに合わせて声をかけ、呼吸のリズムを整える援助を行った。さらに、疼痛や不安を和らげるために体位を工夫し、可能な範囲で家族に経過を説明して安心感を提供し、患者にとって心理的支えとなる存在を確保した。

これらの看護実践により、患者は徐々に落ち着きを取り戻し、処置への協力姿勢も高まった。退院後には「治療中、看護師の声かけで安心できた」という言葉を聞き、心理的援助が急性期患者の安全な治療継続と回復意欲につながることを実感した。この経験は、急性期看護において生理的ケアと心理的ケアを統合して実践する重要性を学ぶ契機となった。

問2

【出題意図】

1.現状分析力の評価

現在の臨床における課題を、個人的な困難ではなく「看護上の課題」として抽出し、背景を論理的に説明できるかをみる。

2.解決志向の姿勢

課題に対してどのような対応策を考え、具体的に実践しているのかを確認する。単なる問題意識ではなく、実行可能な解決策を提示できるかが重要。

3.多職種連携・教育への展望

個人の実践にとどまらず、チームや教育への広がりを意識できるか。CNSに必要な「システム改善・指導的役割」を担えるかを評価する。

4.論理性・文章力

「課題 → 対応策 → 効果 → 今後の展望」という筋道を明確に示せるかを確認する。

【解答例】

現在、私が実践を通して直面している看護上の課題は、急性期病棟における「患者の心理的援助の不足」である。急性期では循環動態や呼吸状態の安定化など治療的介入が優先される一方で、患者は突然の発症や侵襲的治療による強い不安や恐怖を抱えている。しかし、限られた人員体制や業務の多忙さから、心理的ケアを十分に行う時間が確保できず、結果として患者が「孤独感」や「治療への不安」を抱えたまま過ごしてしまう状況を目の当たりにしている。

この課題に対する対応策として、私はまず「短時間でも効果的な心理的援助」を意識して実践している。具体的には、バイタル測定や処置の合間に、患者の状態をわかりやすく説明し、安心につながる言葉かけを行うことを心がけている。また、患者の表情や訴えから心理的变化を捉え、必要に応じて臨床心理士やリハビリスタッフと情報を共有することで、多職種で支える体制を整えている。さらに、病棟全体で心理的支援の重要性を共有できるよう、カンファレンスでの事例提示や、観察視点の工夫を提案している。

この取り組みを通して、患者から「安心できた」「治療に前向きになれた」という反応を得ることもあり、小さな関わりでも心理的支援が患者の回復に大きく寄与することを実感している。今後は、心理的援助を体系化し、教育や研究にもつなげることで、急性期看護における心理的支援をより標準化・発展させていきたい。